

紀  
要

成安造形大学附属近江学研究所

第  
14  
号  
—  
2  
0  
2  
4



## 目次

近江八幡市白王町の行者講	3
―地域に息づく伝統行事の現状とこれから―	
加藤 賢治	
成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長	
近江の懐をめぐる 8	13
石川 亮	
美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員	



# 近江八幡市白王町の行者講

— 地域に息づく伝統行事の現状とこれから —

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤  
賢治

## 近江八幡市白王町の行者講

## ―地域に息づく伝統行事の現状とこれから―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

## はじめに

筆者は、これまで宗教民俗学の観点から、地域に息づく伝統行事に目を向け、それらを支える多くの人々の声を拾いあげてきた。

「講」については、現在も行われている大津市真野の「庚申講」<sup>〔註〕</sup>の実態や、同じく大津市真野中村の「六斎念仏」<sup>〔註〕</sup>などについて取りあげてきた。その際に、近江八幡市白王町の「行者講」は気になっていた。それは、その年の当番である人物が、頭から水を被って集落を走るといふ奇行で知られ、滋賀県では、年中行事の記事として、毎年新聞やテレビなどで紹介される行事であり、一度取材をしたいと思っていた。二〇二五年度に編集する文化誌『近江学』のテーマは「講」であることもあり、以前から興味を持っていた「行者講」を探ってみることにした。ただ、調べてみると、残念なことに、水をかぶるといふ行事（白王の水行）<sup>〔註〕</sup>は、コロナ禍に見舞われた、二〇二一年以降実施されていないということがわかった。しかし、「講」としての集まりは持たれており、その他にも、自治会活動と並行して、複数の「講」が組織されているという。この論考では、今後、この「講」をどのように継続させていくのか、また、一旦中止となっている「水行」が再開される

可能性があるのかを含め、現状を取材し「講」の行方を探ってみた。

## 第一章 行者講の概観

## (一) 講とは何か

はじめに、行者講とは何かを述べる前に、「講」とは何かという大前提を以下に記しておく。

民俗学でいうところの「講」とは、民俗学者の櫻井徳太郎が一九六二年に吉川弘文館から出版した『講集団成立過程の研究』に詳しく述べられている。その中で、櫻井は講の性格を下記の三つに分類している。

- ① 信仰的な集団としての講
- ② 経済的な集団としての講
- ③ 社会的な機能を備えている講

信仰的な集団としての講とは、代参講として成立しているもので、代表的なものとしては、伊勢講が挙げられる。江戸時代中期ごろに盛んとなり、集落の中で講を組織し、概ね月に一度ないしは二度程度集まりを持って、お金を集め、年に一度代表でお伊勢参りに行く人物を決めて、集まったお金を伊勢までの旅費や家内安全・無病息災のお札の購入に充てるというものである。江戸時代の旅は全てがこのよ

うな神仏への代参であり、代表者はお参りとお札の購入を目的とするものの、旅を楽しみ、自らが暮らす地域以外の場所を見聞し、そこで得られた情報を土産話として、帰った時に村人に話をするという、非常に貴重な役割も担っていた。このような代参講は、伊勢講の他に、富士山に登拝する「富士講」や、火の元の用心のために火伏の靈験がある静岡県浜松市にある秋葉神社に参るための「秋葉講」、関西では、同じく火伏の神である愛宕権現に参るために京都市の愛宕山に登拝する「愛宕講」などが知られる。

代参講以外にも信仰的な講には、「観音講」「阿弥陀講」「地藏講」「庚申講」「念仏講」など、民間信仰の一つの形式として、観音菩薩や阿弥陀如来など、特定の仏様を信仰するために、講員が当番の家に集まって、飲食を伴う行事を行っている。

一方で、経済的な集団としての講とは、「頼母子講」に代表される相互扶助的な講である。十軒程度の家が集まって、講員がお金の積立を行う。現在のような金融機関が発達していなかった江戸時代では、まとまったお金を得ることが難しかったため、集落で講を組織して少しずつお金を貯め、まとまったお金が集まった段階で、抽選などによって、一人に全額を与え、数年間かけて全員がまとまったお金を受け取った段階で講を解散するというものである。まとまったお金の使い道はさまざまであるが、急遽お金が必要となった家に、そのお金を回すという相互扶助の役割も担っていたという。近代になって個人が、金融機関を通じてお金を調達できるようになると頼母

子講の役割は終了したと考えられ、頼母子講が今も続いているという報告を聞くことはない。

また、社会的機能を持つ講としては、子供組、若者組、壮年組、老年講、同年講などの集落などの地域社会の中で、同世代で講のような集団を組織して、祭礼や行事にその集団で参加し、交流を深めるものがある。同年という組織は、筆者も過去に取材したことがあるが、「註3」いわゆる同級生がグループをつくり、毎月どこかの家に集まって飲食をして親交を深め、お金を積立って全員が厄年となる年に、産土うぶすな神となる神社にまとまった金額で修理や、祭礼の道具などを奉納するなどする。

このように、講とは、民俗学、社会学、宗教学を通じて、多角的に研究が進められているが、江戸時代を中心に、全国各地にさまざまな「講」が存在し、一人の個人が、複数の講に所属して、楽しく暮らす姿があったと想像できる。

## (二) 行者講とは

では、行者講とは何かということであるが、行者講というものも、大きくは二つに分けられる。一つは、修験道の祖師である役行者を信仰の対象として、その霊場で靈験を得る修験道の実践的な講である。飛鳥時代に役行者が開山した奈良県南部の大峰おおみね山山上ヶ岳さんざんじょうがたけに登山し、修験者として山伏の装束を身につけ、修行を行いながら自らが靈験を獲得し、採燈護摩供さいとうごまくを行う講である。採燈護摩供とは、無病息災、家内安全、商売繁盛、学業成就などの人々の

願いが書かれた護摩木を、護摩壇で焚いて、人々の願いが成就するように祈る行事である。

もう一つの行者講は、大峰山山上ヶ岳にお参りをした代参講である。これは先述した、信仰的な集団としての講に属する講であるといえる。今回、筆者が取り上げる近江八幡市白王町の行者講は、白王町という集落の中に組織され、月に一度の講の日に、役行者の掛け軸の前に、講員が集まり、簡単な神事後、飲食をして集金し年に一度大峰山へ代参がお参りに行くという集団である。

## 第二章 白王町白部の行者講

### (一) 白王町の行者講(新講・旧講)の現在

白王町はかつて白部しらべと王ノ浜おののはまという二つの字からなり、明治時代のはじめに字が合併して現在の白王町となった。白部の現在の戸数は約四十戸で、その中に行者講が二つ存在する。新講と旧講と呼ばれ、講員はそれぞれ十三軒の家長が務める。

今回、新講の講員である大西實氏に話を聞く機会を得た。

大西氏によると、本来、この行者講は、代参となつた者が、五月八日の戸開けから九月三十日の戸閉めの期間内に年に一度大峰山山上ヶ岳の金剛蔵王権現を祀る蔵王堂に参拝し、講員全員の札を受け取り、配布するという。不動明王の命日が六日「註4」ということ、毎月六日に講員が決められた宿やどに集まり、不動明王の掛け軸をかけて般若心経を唱え、会食を

していたというが、十年ほど前にこの月参りは省略され、一月六日の初行者講と九月の年に二度のみ、講員が集まっているということである。

代参については、かつては概ね九月に大峰山に参拝していたが、現在は麓にある天川村の洞川温泉にある陀羅尼助を販売するお店に連絡して、お札を送ってもらっているということであった。お札は役行者が描かれた白黒のもので、家内安全や無病息災の願いが込められ、貼る場所は各家によってまちまちで、お札の箱に入れて大事にお祀りする家もある。

かつて、この行者講は、白王町だけでなく、隣の町である島町や中之庄町などでも盛んに行われていたという。そして、白王町も含めこの地域の行者講の特徴は、代参で大峰山に向かう者が、一週間前に川などで不動明王の真言を唱えて水垢離（水垢離）を行うことであった。

この水垢離をコロナ禍前まで行っていたのが、白王町白部の行者講である。

## （二）白王町白部の水垢離（水行）

白王町白部の水垢離は、一般には「白王の水行」と呼ばれている。以降は水行と表記する。現在の水行は、一月六日の初行者講の日に行われていた。水行を行うのは、基本は大峰山に代参に行く行者ということであるが、厄年の者や、特別に願をかけた者が水行を行うことができた。太平洋戦争の戦時中には無事の生還を願って水行をする者もあったという。



写真1 2004年の水行の様子① 大西實氏提供



写真2 2004年の水行の様子② 大西實氏提供



写真3 2004年の水行の様子③ 大西實氏提供



写真4 2004年の水行の様子④ 大西實氏提供

大西氏によると、水行を行っていた時、必ず半月ほど前に新聞やテレビの取材が入り、今年は誰が水行をするのかという問い合わせがあったという。「決まっています」と返答すると「なぜ?」「決まっていないとはどういうことですか?」と驚かれたという。

水行は、かつては代参の者が水垢離として行う慣習であったが、近年は申し出によって決めていた。毎年、十二月になると、「今年は誰がやる?」という雰囲気が集落の中に広がる。大事なことは、集落の者にとつて、水行を行うことは決して避けたいものではなく、「水を浴びさせていただく」という精神で、水行を行う者が申し出るといふ。そこにこの行事の信仰として大切に守られてきた意味を感じる。大西氏が子供の頃は、行者の力強さ、勇ましさに憧れ、将来はかっこいい行者になりたいと思っていたという。

水行を行う行者は、新講、旧講からそれぞれ一名



写真5 ナンテンの枝が入った清めの水  
大西寛氏提供

の計二名であるため、申し出が多い年は、長老が申し出者の思いを聞いて独断で決めていた。マスコミが取材するタイミングで水行を行う行者が決まっていないことがこの水行の特徴でもあり、興味深いところでもある。

一月六日の夕方、水行を行う行者二名が、白王町の東端の家に集まり、長老が導師役を務め、庭で火を焚いて般若心経を唱えることから始まる。

行者の姿は、草鞋をはき、六尺褌（かつては洪紙）をつけ、ほぼ裸同然で、頭にはビニール（かつては洪紙）をかぶってサラシで締め付け直接頭に水がかからないようにする。首には念珠をかける。

集落の家では、清めの水が入ったバケツを一つずつ用意する。清めの水は、各家で用意するが、必ずナンテンの実と枝（難を転ずるの意味）を入れる。バケツの数は講員であるなしに関係なく、集落の家数となるので、合計四十個。「お水取り」と呼ばれる人が、「この水とったり」と唱えて行者を先導し、行者は、「南無行者不動」と叫んで、念珠を噛み締め、

頭から清めの水をかぶる。行者は四十軒分の清水をかぶっていくという非常に厳しい行となる。

集落の西の端の家で温かい風呂が用意されており、水をかぶり終えた行者はゆっくりと湯船にかかる。こうして水行が終わると、講員が代参の費用となる白米を集める。そして、新、旧それぞれの講の宿の家に講員が集まり、うどんやぜんざいなどが振る舞われる。旧講では、百万遍数珠練りが行われたという。こうして、年始の初行者講が終了するという流れであった。

### 第三章 講のこれから

#### (一) 白王町の講

現在、二〇二〇年を最後に行者講における水行は、一旦中止ということになっている。理由はコロナ禍において不要不急の行事ということで自粛され、その後は、水行を行う人物が現れないということ、中止という状態のままである。ただ、水行は中止しているが行者講自体は継続されており、一月と九月には、講員が集まって簡単な神事と食事会が行われている。

白王町には、行者講の他に「日待講」「神明講」「伊勢講」「愛宕講」「津島講」という講が存在している。「日待講」と「神明講」の講員は、白王町白部地区の東組十七人、中組十人、西組十人、王ノ浜地区の大西組十人ということで、白王町の全戸の家長が講

員ということになる。各組ごとに講が行われ、二月十七日（伊勢神楽の前日）に行われるのが「日待講」、稲刈りが終わった十月中旬に行われるのが「神明講」と呼ばれ、コロナ禍前までは、各組ごとに、掛け軸の前で祝詞をあげ、そのあと懇親会をしていたとのこと。

「伊勢講」と「愛宕講」、「津島講」は代参で本社にお参りにいく目的を持った講である。伊勢講は、白部地区の東組、中組、西組の代表者三名と王ノ浜地区の大西組の代表者一名の四名が毎年三重県の伊勢神宮に代参してお札を白王町の産土神である若宮神社に収める。津島講は、順番で決まっている二名の代表者が愛知県津島市の津島神社に代参でお参りに行き、牛頭天王の疫病退散、厄除けのお札を持ち



写真6 「日待講」「神明講」の掛け軸を入れる箱と講の帳簿  
2025年1月筆者撮影



写真8 若宮神社の鳥居前にある牛頭天王祇園社  
ここに津島講のお札が入っている  
2025年1月筆者撮影



写真7 若宮神社の鳥居前に  
ある愛宕講のお札が入る石塔  
2025年1月筆者撮影

帰り、若宮神社の鳥居の横にある牛頭天王祇園社と呼ばれる祠に収める。愛宕講は、京都市右京区の愛宕山の火伏の神にお参りをする代参の講であるが、平成二十八年（二〇一六）を境に、代参は中止で、お札を郵送で送ってもらっている。

日待講と神明講は、少なくとも講員の集まりが保たれているが、代参を目的にする講は、かつては集まりがあつたそうであるが、現在は代参のみとなつて

いる、または代参も行っていないという現状がある。なぜこのようになってきたのかということについては次項で述べたい。

## （二）講が続いて行かない理由

なぜ、講が今までのように盛んに行われなかつたという理由について、大西氏に尋ねてみた。大西氏は現在六十九歳。今から五十年前は、白王町での講はいずれの講も賑やかに行われていたという。とりあえず、みんなが集まって一杯飲んで、日頃のたわいもない話から心配事などさまざまな話題でいっぱいだった。地域のいろんな情報が飛び交い、入ってくる絶好の機会であつた。そこで振る舞われるものは、かしわのじゅんじゅん<sup>【註6】</sup>や、ちよつとした幕の内弁当のようなものだったが、それを食べる楽しみがあつた。

しかし、今、講の運営を担っていくとする人たちは、大西氏の一世代後（三十代から四十代）になり、社会の風習も変化し、価値観も含め大きく変わってきている。具体的に例を挙げると、まず、お酒（特に日本酒）を飲む若者が減ってきていることや、加えて、大勢で集まって飲食することがなくなってきたこと（二〇二〇年のコロナ禍以降は特に）、また、かしわのじゅんじゅんや幕の内弁当などに魅力を感じないなどが挙げられる。

集落の伝統的な慣習や信仰、地域コミュニティなどについては、心のどこかに大切であるという意識はあるものの、合理的にできないかということ为先

に考える風潮がある。

現代社会には、自分が暮らす地域以外に、楽しいものがたくさんあり、食べるものにも溢れている。かつてハレの日といえ、祭りの日であり、非日常的な食べ物や催事があつて、みんなが笑顔になる楽しみがたくさんあつた。現代に至っては、日常がハレの日であり、いつでも、どこでも、お金さえあれば、楽しみを享受できる。人のつながりも、わざわざ地域の人々とながらなくても、自分を中心に職場のコミュニティや趣味でつながる楽しいコミュニティがある。

また、大西氏は、「日待講」と「神明講」の講員に現状の聞き取りをしてくださった。

①「日待講」と「神明講」の直会<sup>なほひ</sup>（懇親会）が無くなつた理由

- ・ 家の者（家族・主に戸主の妻）に家周り（順番に）で組員を呼び食事の世話をするこの理解が得られない。（若い戸主の意見）
- ・ 男性中心社会の名残で、女性は出られない、裏方のみ
- ・ 酒の好きな人の寄り合い（飲めない人は苦痛）
- ・ 宿が世話することの苦労が大変（今の世代、酒を飲まない）
- ・ 昔は年に一度の楽しみ（その翌日に獅子舞が来るのも楽しみであつた）
- ・ 今の時代にそぐわない、楽しみでない
- ・ 日待講は、ハレの日を待つ一大イベントであつ

たが：

・「そんなに宴会したかったら他に何行って（宴席のある店）したらいい」とある若い者が発言したら、少し年長の者が、「講の目的が違うやろ、そんな考えやったらわし講をやめるわ」となり、一騒動発生した。

②講の目的・主旨が正しく伝えられているかどうか。

・ただお宿の家に正装して扇子を持って定刻に行けばいい。伝わっている世代が交代するときも、日待講ってなんや？神明講って何？が正しく家長から伝わっていないのと、また、伝えても、その重要さがほぼ理解できない世代になってきている。

・幕の内を食べるだけなんや：：くらいの意識しかない（ご馳走でないが）

・大人にも責任がある。正しく伝授していないこと

・お宿さん（当番の方）への連絡、講の全般的な責任者である組長が、講をお荷物的感覚で意識している。（うっさいな、なんでこんなのやらんならんの感がある）

・若い組長やからではなく、社会全体の変化が大きく影響する

・家は家族のもの、プライベートの詰まった聖地、そこを皆さん来て頂いて懇親会をすることが、全く理解できないし、相入れない。講をする不自然さへと否定的意見が固まりつつある。

講員に以上のような意識がある中で、講を大切に続けてきた世代の人々は、次の世代に引き継いでもらいたいと熱望しつつ、無理やりに伝統的な風習を続けてほしいと強要できない。自分たちの気持ちを伝える努力はするが、無理やり引き継いでくれたとしても、いずれはなくなってしまうと思う。これは仕方ないと大西氏はおっしゃった。

（二）講に変わるもの

白王町の現在の取り組みの中で、地域の人々が世代を超えて交流する取り組みとして、講に代るようなものがあるという。それは、白王町集落営農組合の活動である。

白王町は、西の湖という琵琶湖の内湖に面しているが、その西の湖に浮かぶ権座ごんざという鳥状の農地がある。平成十八年（二〇〇六）に、この権座も含めて周辺地域が、「近江八幡の水郷」として国の重要な文化的景観第一号に選定された。このことが大きな機運となって、平成二十年（二〇〇八）に、白王町

集落営農組合の有志が「権座・水郷を守り育てる会」を発足させ、権座での酒米づくりや収穫祭、コンサートなどを実施して地域づくりが積極的に行われた。

すると、そこに人が集まり、一旦故郷を離れた十名以上の若者世代がUターンして故郷に帰ってきたという。そして、その流れから、現在、三十代から四十代半なかばの若者が積極的に営農組合の農作業等に関わってくれている。彼らは別に仕事を携えているが、農繁期には、休みの日を利用して農作業を手伝って

くれる。もちろん時給で、賃金を払っていることもあるが、草刈りなど厳しい農作業にもしつかり取り組んでくれる。農作業で体を使って、みんなと交流し、少しだが収入にもなる。営農組合のみんなと作業する姿が何よりも楽しそうであるという。

白王町集落営農組合は、白王町の住民のほとんどが出資してできた農業組合で、離農者が増えたためできた多くの休耕田を耕し、先祖が残してくれた大切な農地を守っていくことが目的である。そこに地元ちよんの若者の力が加わったことは、大変嬉しいことだと大西氏は語っておられた。

まちづくりや、伝統を受け継ぐことも、実際に担っている人たちが楽しくなくては持続しない。伝統的な「講」には、信仰の大切さや、地域文化という貴重なものを含んでいるが、それを実行する際の楽しみたのしみのあり方が、時代に合っていないというのが現状であろうか。それを克服することができれば、講の継続は難しいのかもしれない。

#### 第四章 「行者講」の水行の行方

（一）水行への思い

最後に、大西實氏に「行者講」のこれからのついて伺ってみた。

「行者講」をこれからの世代にバトンを渡していく中で、時代が今までと変わっているからと言っても、時代を超えた大切なものが伝統的

な講の中には受け継がれていると伝えていきたくて思っている。同じ白王町に住んでいて、年に一度も会うことがないというのは寂しい限りである。

近江八幡で今もなお受け継がれる「松明祭り」は「松明結」と呼んで、設計図も何もない中、共同で作業して大きな松明を完成させる。そこにかけてえのないコミュニケーションが生まれ、さまざまな情報交換がなされ、世代の中で大切なものが次の世代に受け継がれるという機能を持っている。

一方で、古い慣習には息苦しさもある。白王町を守ってくれる鎮守の神様である若宮神社には、かつて、社守という制度があり、厄年に近い四十二歳前後の男性が、社守という役を二年半務めることになっていた。その二年半にはさまざまな禁忌があり、肉類や卵、牛乳など食べられない。食べられるのは魚だけ。そして年間二〇〇日、神社に出仕しなければならぬなどのしきたりがあった。しかしこれは、その当時（私が四十代の頃）の時代に合っていないということ、三年ほど長老格の人たちと話を続け、ようやく今の時代にあった制度に変えたという例がある。

「行者講」の水行は、唯一この白王町にしか存在しない貴重な地域文化である。今残っている行事は、先人がこの地でつないできたもので、我々が暮らすこの地の大切な記憶である。なか

なかうまく言葉にはできないが、次世代の人たちにこの大切さを理解してほしいというのが本心であり、「講」という行事は決して無くしてはいけないと思う。

行者講の水行については、来年は、少し早い目から講員の人たちと相談を始めようと考えている。誰か水をかぶる行者に立候補してくれるか。なければ、再来年でも。毎年水行をしなくても、何年かに一度でもできるような制度にしても良いのではと思っている。



写真9 若宮神社の本殿  
2025年1月筆者撮影



写真11 白王町の産土神である若宮神社の参道  
2025年1月筆者撮影



写真10 白王町のメインストリート  
この東西の道を東から西へと行者は清めの水を被りながら歩く  
2025年1月筆者撮影

## (一) まとめ

近江学研究所では二〇二五年度に「講」をテーマにコミュニティについて研究を深めていこうとしている。今回の論考はその序章と考えたい。近江には多くの「講」と呼ばれる地域のコミュニティが今もなお、残っている。筆者は、これまでにさまざまな「講」を取材してきた。その中で感じたことは、あたり前のこともかもしれないが、今回の近江八幡市白王町の事例も、他の事例も、「講」は、信仰として、地域文化として大切だが、これを受け継ぐ次世代の理解が無く、おそらくあと数年で終わらなくてはならなくなりそうという状況が共通していた。

どこまで、時代に合わせて形を変えることができるか。それが「講」存続の要であるのかもしれない。水行の復活に際して、大西氏の毎年でなくてもいいじゃないかというような、寛容な態度で講員に少しずつ投げかけていくことも大事なことで今回の取材で感じた。「講」の継続に対しては、決して明快な答えがあるわけではないが、そこには、先人の知恵であったり、自分が暮らす土地の積み重なってきた歴史を感じることができると大切な行事であることには違いない。

最後になりましたが、長時間の取材にお付き合いいただき、また貴重な写真や関連資料をご提供くださった大西實さんにこの紙面を使い感謝申し上げます。

## 注釈

二年

1. 「真野北村の「庚申講」——三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第十号 二〇二一年発行に詳しく紹介している。
2. 「真野法界寺の六斎念仏」大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第五号 二〇一六年発行に詳しく紹介している。
3. 近江学研究所発刊文化誌『近江学』第十号「湖と生きる」「湖辺の暮らし—伊庭集落—」という論考で「同年という組織」という見出しで取り上げている。
4. 旧暦の三十日をそれぞれ仏様の縁日とした「三十日秘仏」という信仰では、不動明王の命日は二十八日であるとされ、不動明王の縁日は一般的には二十八日となっている。
5. 水垢離とは、神聖な水で心身の垢（あか）を落として、身を清める行事のことをいう。
6. かしわのじゅんじゅんとは、滋賀県では、鶏のすき焼きのことを指すが、祭礼の直会（ナオライ）や、講などでのお会食で振る舞われる時は、家で採卵用に飼育していた鶏の中で、その役目を終えた鶏（おやどり・ひねどりという）をさばいて、感謝を込めていただくという。近江八幡市白王町でもその風習がある。

## 参考文献・資料

- ・近江八幡市史編纂委員会編『近江八幡の歴史 第三巻 祈りと祭り』二〇〇七年
- ・「ふるさと鳥」編集委員会編『鳥学区五十周年誌 ふるさと鳥』二〇一四年
- ・櫻井徳太郎著『講集団成立過程の研究』吉川弘文館 一九六

「真野法界寺の六斎念仏」大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第五号 二〇一六年

「真野北村の「庚申講」——三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第十号 二〇二二年



# 近江の懐をめぐる 8

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川

亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's "Futokoro": Part Eight

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）の風土に根ざし、未来社会へ向けてものづくり、新たなライフスタイル、伝統の継承などを実践し発信している人々と、それを支える近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中にいきづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを目的としている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりわ湖芸術文化財団）が発行する『湖国と文化』に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たな価値を写真と文で紹介する機会を得た。二〇二四年一月時点で二十七回の連載に達している。二〇二三年一月より同年十月にかけて掲載された第二十四回から第二十七回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

## はじめに

八回目となる「近江の懐をめぐる」研究に取り組んだ二〇二四年度は、一年を通して振り返ってみると自然災害を目の当たりにした年と言える。年始から令和六年能登半島地震が起こり、甚大な被害が起きた。八月は日向灘で発生した地震がマグニチュード七・一を記録し、震源地が南海トラフ地震域内にあったことから南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）がはじめて発表された。九月には能登半島豪雨災害が起こり、再び自然の脅威にさらされた。さらには二〇二四年末から二〇二五年始にかけて、青森市では歴代最多の積雪を記録した。また最高気温三十五度を超える猛暑日が六十二日と歴代最高を更新し、全国のアメダスで観測された猛暑日の延べ地点においても一万を超え、過去最多を記録するなど、自然災害の脅威と気候変動による温暖化の影響が顕著になりつつある。

二〇二四年もロードバイクを用いたフィールドワークは継続されたが、猛暑か極寒のどちらかを疾走した印象が残っている。滋賀県は観光振興の一環として、ビワイチ（琵琶湖の周囲約二〇〇キロメートルを自転車一周する）を推進しているため、日々琵琶湖周辺の湖岸沿いの道の整備が進められてい

る。道路の左側を自転車専用の青いラインで表し、路側の傾斜をフラットにするなど自動車と自転車の双方が注意しながら走れるように整備が進んでいる。それは琵琶湖岸に留まらず湖岸から各地域の魅力ある場所へと導くコース、ピワイチプラスの整備、展開も進んでいる。二〇一九年、ピワイチが国土交通省の設定するナショナルサイクルルートに位置づけられて以来、観光振興から健康維持、環境意識向上など近江（滋賀県）に住む人、訪れる人双方に対し、より良い暮らし（ウェルビーイング）とは何かを問うきっかけになっていると言える。このように自転車走行環境の整備が進み、自転車で琵琶湖の周囲を走れる条件は整ってきている一方で、健康を害するほどの自然環境の変化を身近に感じるのも事実である。

はじめは湖北、草野川上流部に位置する山間部・郷野地区と、西へ峠を隔てた平野部・小室地区を結ぶ谷坂隧道を紹介する。この隧道は、車一台がようやく通行できる幅員であり、昭和初期に開通し、地域間を結ぶ生活道路として重要な役割を果たしてきた。近江を代表する近代の遺構の一つに位置付けられる。二つ目は自然の川の流れを活用した日本最古の養鱒場を紹介する。霊仙山の麓、その自然を暮らし、産業に取り込み一体化させた施設と言える。その歴史と運営の変遷を読み返しながら今日も持続する姿を考察した。そして古都大津の古民家再生の例を二回に分け、四件の店舗実例を取り上げた。これらはいずれも古民家の原形を留めていること、古民

家活用に至るまでに関わる様々な人々のつながりや目的意識の共有など、大津市中心市街地における独自の古民家再生プログラムに着目した。これまで「近江の懐」研究の一つひとつのタイトルは、地域名とそこにある事象を組み合わせてきた。二〇二四年は地域名を省き、事象や事実に着目するタイトルとした。その土地（場所）の特性、条件によって臨機応変に対応する人々の気質そのものに焦点を当てることが「近江の懐」研究の探求拡大を意味すると考えている。

## 一、現役の隧道

この「近江の懐」で、私は「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業なりわい」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを目的としている。その原点は以前「近江の水をめぐる」研究で紹介した「湧水探し」にある。

今回はかつて、その湧水に行く途中に見た「現役の隧道」に迫りたい。その湧水とは湖北、草野川上流の高山集落に位置する「堂来生水どうらいしょうず」である。ここへ辿り着くには本来、姉川から支流の草野川に沿って北上する新道を使うか、県道二六四号（旧道）より上草野地区を抜けてアプローチするのが通例だ。しかし、私の記憶では木之本より南下し高月町馬ま上で「テンオーの水」を汲んだ後、さらに少し南

下し小谷城址あたりから山側に入り、目前の峠を越えて草野川側道（新道）に入った。今回、自転車でこの地を再訪、上草野・野瀬在住の古地図蒐集家で元高校美術教員の松井善和まついよしかずさんに案内していただく機会を得たことにより、再確認した「現役の隧道・谷坂隧道」を紹介したい。

二〇二三年の暮れ、堂来生水への道を再確認すべく、松井氏の案内で北国脇往還小谷宿（伊部）から東へ田川と並行して進む。途中クランクを数回曲がり田川、瓜生、野田の集落（旧田根村）を過ぎると、目前に三〇〇メートルに満たない低山が南北に現れる。その麓の集落小室は、小堀遠州の名で知られる小堀政一こぼりまさかずが一六一九年より「近江小室藩」として立藩、その後、六代政方まさみちが改易される一七八八年まで続いた。

山麓まで来ると最後のクランク付近に小室城（陣屋）図を案内する看板がある。北国脇往還の宿場町の共通点は山裾に位置しクランクになっている。またこの地はクランクに沿うように水路が走っており、松井さんが仰るには「周囲の山裾から染み出すように水が流路を形成している」のが特徴だ。さらに間口を狭くして防御態勢が整えられている。小室もそれらの様相が感じられる。若狭、越前から江戸へ向け長浜、米原を経由せずしてショートカットできる交通の要衝だったことは一目瞭然と言える。

さて小室から山道へ入って数分、いよいよ峠越えかと振り返り、辺りを眺めると木々の隙間から田園風景が垣間見え、標高が上がっていることが確認で

きる。そして前へ向き直すと、突如として真つすぐの貫通孔が現れた。隧道だ。穴の向こう側の風景が小さく見え、何とも不思議な光景である。その見事な貫通孔をまっすぐ突き進み、向こう側に出ると辺りは田園風景と化した。さらに進むと左（北側）から右（南側）へ草野川が勢いよく流れている。それは草野川の流れが運んで堆積した地形であることが想像できた。松井氏は「山上（小室・田根側）のトンネルを潜り抜けるとそこは山麓（郷野・上草野側）になっている。谷を一つ隔てて見える地形の成り立ち、その違いがこの谷坂隧道を通じて理解することができる」と話された。その間、双方向から自動車が行き来している。隧道が真つすぐであるため、双方が譲り合い片側通行のルールが自然にできている。「まさに現役のトンネルです」と松井氏。出口の郷野から川上へ少しのところに野瀬集落がある。背景の山の中腹に天台宗の古刹・大吉寺があり、野瀬は旧上草野村の中心集落と言える。また、隧道坑口（トンネルの入り口）へと戻り上部の扁額を確認した。「谷坂隧道 昭和拾年拾二月竣工 村地書」と記されている。

この谷坂隧道は一九三三（昭和八）年着工。二年後に完成した。延長三〇〇メートル、内幅四・八メートル、高さ三・〇メートルのコンクリートトンネルであり、近代土木遺産のAランクに位置付けられている。その設計者・村田鶴は、「滋賀の近代のトンネルの歴史と村田鶴が残した隧道群」（田中雅彦・上野邦雄著）によると、一八八六（明治十七）年七

月一日茨城県に生まれ、一九一八（大正七）年十月より滋賀県の隧道工営所主任となり、昭和十一年の退職までの間に優れた意匠のトンネルを設計した。土木百年表で村田鶴が設計者として明記されている隧道は、佐和山隧道、横山隧道、観音坂隧道、谷坂隧道の四つである。工費は十五万六千円のうち二万三千元は田根、上草野が拠出した、と記されている。煉瓦からコンクリートへと建設材料が変化するのに合わせ、設計を洗練させてきた村田の意匠についても評価が高いことは言うまでもない。

年明け、改めて小谷宿から田根集落を経て谷坂隧道を体感する自転車走行を試みた。小室からゆっくり上がり十分程度で西側坑口に辿り着いた。獲得標高は六十六メートル、隧道の中はコンクリート壁に苔むした緑や水が滴り落ちるありさまが美しい。東側坑口先の景色が見えるのも不思議な感覚である。今は電灯が等間隔に配置され安全が保たれている。「昔は入口近くと真ん中の三灯のみ、暗くて怖かったんや！」との松井氏の声を思い出しながら、今日に続く「現役の隧道」をくぐり抜けた。



写真1 北国脇往還の宿場町の特徴を話す松井善和氏



写真2 谷坂隧道西側坑口（小室・田根側）



写真7 草野川側道より谷坂隧道東側坑口を望む



写真5 隧道内



写真3 谷坂隧道東側坑口（郷野・上草野側）



写真8 国土地理院地図（田根—上草野：広域図）



写真6 小室側坂道より谷坂隧道西側坑口を望む



写真4 扁額「谷坂隧道 昭和拾年拾二月竣工 村地書」

## 二、養鱒の川

「醒井」は、狭い谷間に位置していること。目が醒める様な冷たい水が湧き出る場所。いずれも地名が環境や伝承を表していると推察できる。醒ヶ井駅から中山道を西へ県道十七号との交差点を南へ、枝折集落を過ぎたあたりで丹生川と合流する。川沿いを上流へ少し走ると醒井峡谷に入る。その最終地点が醒井養鱒場である。以前はこの川沿いを辿って湧水汲みに訪れたことがある。丹生集落の「いぼとり水」・溪谷の岩肌から流れ出る「岩清水」、養鱒場内に設置される「鍾乳水」と名称のある湧水を一回の湧水汲み調査で汲み廻ることができた。カルスト地形で知られる霊仙山を背景にその麓に位置することから豊富な水が絶えず湧き出ている。この環境を活かして今日も養鱒を持続する醒井養鱒場に焦点を当てて。その理由の一つに自然の川（総谷川）に鱒が群を成して泳いでいる光景があるのだが、幼少期釣り好きであった自身の経験から、今日では考えられない風景だ。その不思議さから醒井養鱒場を紐解きたいと考え、滋賀県水産課の三枝仁氏に連絡を取り、醒井養鱒場長の桑村邦彦氏とお話することができた。

二〇二四年三月寒さが続き春の訪れが遅い。正面入口で三枝氏と待合せ、本館の事務室に向かう途中、場内の河川（総谷川）を覗くとウヨウヨ泳いでいる様子が見える。三枝氏に聞くと「誰もが知るニジマスです」と、ここで育った魚が放養されている。自

然の川が養鱒の場であることが現代社会では不思議に感じる。本館にて桑村氏に出迎えていただくと応接室に招かれた。そこで養鱒場の詳細を丁寧に描いた二メートル角程の絵図を目にした。軸装された絵は丹生川の上流、総谷川に沿うように飼育池が描かれ、入口には人力車が止まっているなど開業当時を思わせる。木造家屋が立ち並ぶなど建物の様相は現在と違うが、場内配置は現在とほぼ変わらない。しばらくして桑村氏より沿革資料が手渡された。「古い歴史なので、自分では検証できていないのですが……」とお話が始まった。『近江国坂田郡志』などの資料から抜粋したもので「明治十一（一八七八）年九月五日琵琶湖の固有種ビワマスの増殖を図るため設立」から始まる。最初の一年はここより下流域の枝折で、二年目から現在の上丹生に位置する。「明治十八（一八八五）年近江八幡の豪商、西川貞治郎氏へ払下げ」とあり、民間の手に移る歴史もある。「昭和四（一九二九）年に水産試験場附属醒井養鱒場として県営に復帰」「昭和六（一九三一）年ニジマス普及の醒井養鱒場指定料理旅館開業」「昭和三十九（一九六四）年入場者数過去最高四二五〇五八人」「昭和五十四（一九七九）年十月ビワマスの完全養殖成功」という記録があり、観光事業と研究の隆盛期と言える。「平成十二（二〇〇〇）年四月滋賀県水産試験場醒井養鱒分場となる鱒類生産業務が滋賀県漁業協同組合連合会に委託」さらに「平成十七（二〇〇五）年四月醒井養鱒分場が滋賀県水産試験場に統合される」「入場料徴収業務の委託が米

原町観光協会から滋賀県漁業協同組合連合会へ移る」とあり、この時期から事業整理であるのか厳しい時代に入ったと想像できる。一方で「平成二十四（二〇一二年）十月全雌三倍体、養鱒ビワマスの登場」の記録もあり生産普及は躍進している。「平成二十五年（二〇一三年）年四月滋賀県が滋賀県醒井養鱒場で指定管理制度を導入し滋賀県漁業協同組合連合会が管理者に指名される」とあり、現在に至る。

あらためて桑村氏より現在、養鱒場はマス類生産、普及と研修、調査研究の三つの役割があると説明された。調査研究は滋賀県水産試験場研究員と共に行っており本館内に併設されている。館内には回遊水槽が展示されビワマスの生態を直接観察することができる。周囲は養鱒場の仕事や変遷を紹介するパネル展示が設置されている。所々にルアー釣り大会のポスターが貼られていることから季節に合わせたイベントなどの企画運営もされていることが伝わってきた。さらに学生インターンの受入れなど次世代育成にも注力している。

次に本館を出て三枝氏に敷地内を案内していただいた。幻の魚イトウやチョウザメの池、色素の少ないアルビノを集めた池など一般的に見られない魚影に驚く。イワナ池、孵化場、稚魚池、餌付池と川上へ上がるに従って繊細な生産飼育管理を要するエリアに入る。「ここから先は入れません！」と三枝氏。水源近くまでくると防疫エリア（禁足地）だ。湧水研究者としては水源を確認したかったが、その方向を遠くから確認するにとどまった。「奥宮（水源）



写真9 醒井養鱒場絵図



写真10 三枝氏(左)と桑村氏(右)

を遙拝する場所がここにも存在する」と解釈。水源が保たれなければ生産から観光まで行き届かなくなる。まさに聖域である。

川下方向には採卵場、観察池、釣り場や休憩所、食事処、観光施設へとつながる。施設内で「学ぶ、食べる、遊ぶ」と多彩なニーズに応える工夫がされている。再び総谷川の魚群を見ながら今日見聞きたもの全て欠かすことができないと感じた。それは自然の恵みから養鱒を軸に生産から観光まで様々な人々の能力が交じり合いながら、一五〇年近くも活動を持續させてきている。まさにコモンズ(共有地)に他ならない。自然の恵みこそが一次産業だと再確認し、琵琶湖の名を冠した固有種を育てあげるこの場所こそ、近江のアイデンティティを意味すると考えた。

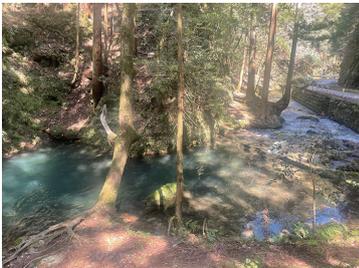


写真15 醒井峡谷を流れる総谷川



写真13 絵図に見える楕円形の飼育池



写真11 水源の方向を望む(防疫エリア)



写真16 アルピノ種の集まる池



写真14 総谷川に群れをなすニジマス



写真12 醒井養鱒場

早速店主の西聖平さんを紹介いただきお話を聞くと、改修工事のご自身で全てされたと言われた。守山市出身の西さんは外大卒業後、主に東京圏で店舗内装のデザインと施工の経験を積まれた。また近年はウェブデザイナーとしても活動するなど自身の思い描くイメージを創造、制作し発信することがで

られた木製ドアを開けるとそこには知った顔が見えた。ここ数年古民家再生事業など、賑わい創生に励む大津市役所職員の藤原周二さんだ。軒先は素敵な「灯り窓」となっていた。

a w a i

大津市中心市街地に位置する長等商店街の中心に日蓮宗のお寺、本要寺の山門が見える。くぐり抜けると路地がひらけ異世界に入った気分になる。本堂のすぐ右手に入りたくなる場が見えた。「あれ!」軒先が崩れたかけた空家であったと記憶していたが、なんとも素敵なカフェに変身している。丸く削られた木製ドアを開けるとそこには知った顔が見えた。ここ数年古民家再生事業など、賑わい創生に励む大津市役所職員の藤原周二さんだ。軒先は素敵な「灯り窓」となっていた。

懐めぐりがスタートして三十回目。再び大津に戻り原点回帰するわけではないが、大津の街並みが少しずつ変化していく姿が気になる。例年六月になると私が教鞭をとる成安造形大学地域実践領域研究室では、「大津の魅力探し」授業を約四週に渡って行っている。町歩きしながら学生と見つけた古民家再生における「やりすぎない再生」あるいは「残し技」に焦点を当てたい。

### 三、新しい古民家①

きる。そこに大工仲間マルシェ企画なども手がけるチャタさんと、路地の裏手で写真スタジオ「おさるぼハウス」を構える藤森由佳さんの四名が出会い、それぞれの持ち技を生かした場づくりをする計画が持ち上がった。二〇二三年七月一般社団法人BAN Dを立ち上げ、「みんなが気軽に立寄れる場」を目指し、クラウドファンディングで資金調達と広報を行った。二〇二三年十月に改修工事をスタート、二〇二四年四月にカフェの営業に漕ぎつけた。

こんなスピーディーにことが進むのであろうか？

そのカフェ空間を見ると大津壁風のグレーの壁と以前の土壁を再利用した荒壁が目に入る。柱と梁はそのまま残し痛みの激しいところは庵スペースの壁材と組み合わせ補強し、材に磨きをかけ、柿渋を塗るなど以前の姿を美しく残している。改修前は二軒の民家であったそうだが仕切り壁を抜いて開放感のある空間が作られている。西さんはコミュニティハウスとあえて名乗らず、「近隣住民、サラリーマン、学生など誰もが気軽に立ち寄れる飲食併設の場に、ギャラリースペースや研究会、店前の路地も使ってマルシェなどが行える場にしていきたい」と語る。このスピーディー展開は何と言ってもこの場の家主である本要寺住職の懐の広さと、都市再生事業に取り組んできた藤原さんとのつながりだ。そして地域の関係を築いてきた藤森さん、実際に「ものごとづくり」を自らの手で起こすことのできる西さん、それを支えるチャタさんがこの場に揃ったからである。学生の「大津の魅力探し」の講評会はこの場で

開催される運びとなった。



写真17 長等商店街



写真19 左から藤原さん、西さん、藤森さん



写真18 本要寺本堂横のawai



写真20 awai店内の様子(大津壁風のグレーの壁面が見える)

## このい(25)

東海道、大津札の辻を曲がって草津方面へ歩く。既に電柱地中化や路面整備も済み、二〇一八年には町家を活用した「HOTEL講 大津百町」が開業、落ち着いた雰囲気醸し出している。そのホテルの角の板塀に立てかけられた木製の看板が気になる。「うつわ酒にのこ」と書かれている。路地を進み突き当たるところが「にのこ」である。ガラッと引

き戸を開け、中に入ると通り庭が見え、そこで靴を脱ぎ左側の見世(店)の間から上がる。その奥、茶の間に位置するところにバーカウンターが設置されている。腰を下ろし店主の丸亀大輔さんに迎えていただいた。茶の間の向こう側、座敷の空間は一段下がったダイニングになっている。梅雨明けの蒸した日だったこともあり特製のコーヒーゼリーをいただきながらお話を伺った。

二〇一〇年にリノベーションをすることを条件にこの物件を購入され、数年は地方勤務が重なりご家族が住まわれていた。二〇二二年六月より器などの工芸を展示するギャラリーとお酒とおつまみを提供する店として開店した。時間をかけてゆつくり改装されたのであろうか、細部の一つひとつが丁寧に設えられている。まず目に入るのがバーカウンターで、古材の様にも見えるが実は工事現場の足場板である。よく見るとペンキのタレ跡が見えるが不思議なことに美しい。次に茶の間と座敷のゾーンニングが面白い。床を抜いてダイニング仕様になり鉄製のテーブルと北欧製の家具と照明器具で構成されている。見世の間に戻り階段を上がると台所とつながる火袋の空間がある。アルミサッシなど所々に残す昭和仕立ての細部が、デッドストックの北欧製スツールと絶妙な関係をつくっている。古民家再生のしゃれた店舗によく見る内装のほとんどを画的で新品仕上げに取り換える例とは違う。以前に住まわれた方の暮らしの痕跡を残しながらも、廃棄処分にしてしまわない工夫と古物の組み合わせを楽しむ店主の感覚



写真23 店前に立つ丸亀大輔さん



写真21 「にのこ」の看板(東海道)



写真24 足場板を使用したバーカウンター(一階)



写真22 こだわりのゾーニング(手前の部屋が一段低い位置にある)

が伝わってくる。所々に展示されている現代の陶芸作家の作品と江戸期の絵皿などがこの空間設定により作品としての価値を際立たせている様に見える。丸亀さんは公務員として食育、就農支援、地域活性化に携わる経歴を持つ。それを自らが実践することで、身近な出会いや気づきに新鮮な感動と美があることを伝えていっているように感じる。

#### 四、新しい古民家②

大津宿、新しい古民家を二回連続で紹介したい。前回の冒頭にも伝えたが、例年六月中旬から、私が教鞭をとる成安造形大学地域実践領域研究室で、「大津の魅力探し」授業を約四週に渡って行っている。町歩きしながら学生と見つけた古民家再生における「やりすぎない再生」あるいは「残し技」に焦点を当てた。中でも今回は「え、こんな場所に」というまさに近江の懐部を伝えたい。

#### 佳山かせん

八丁通(東海道)を京都方面へJR琵琶湖線の丸跨線橋(上関トンネル)を過ぎた辺りに京阪電車京津線の線路と最も接近する場所がある。その踏切の向こうに関蟬丸神社下社が鎮座しているのだが、踏切を渡らず手前左手に見える焼杉板塀の古民家はその現場だ。二〇一八年に関蟬丸神社に目をつけた学生と訪れた時にも気になって覗き見したことを思い出した。それから何度か前を通り、いつか入ってみたいと望んでいた。踏切前の灯籠の前でしばし建物を見上げてみると、踏切音が鳴り、「ゴォー！」と音をたて京阪電車が普通に過ぎ去って行った。そこは傾斜地でカーブの膨み部であることから建物に突っ込むような感じである。思わず「あたり」と言ってしまう。東海道と線路に挟まれた細い敷地に建つ日本料理の店「佳山」だ。料理人で店主の安江洋造さんにお話を伺った。

安江氏は大津の勸学出身、旅館やホテル、料亭での経験を経て、京都ではじめてのカウンター割烹で知られる「浜作はまかく」で十五年の経歴を持つ料理人である。

佳山開店は二〇一八年七月、この物件は株式会社まちづくり大津(大津町家情報館)に大津市内の古民家をくまなく紹介してもらい、自分の条件に合う築九十三年の物件にたどり着いた。日本料理の店に見られる市街地のビルの一階に開店することも考えたが、古物好きであることや歴史が好きなことから古民家探しへ、パートナーの純代すみよさんの「何か面白い味のある店構えが良い」という意見が安江さんにとつて大きく、自分一人だけならきつと王道に走っていたと語る。この地は木曾街道六十九次大津宿の浮世絵がイメージされ、歴史ある東海道と蟬丸神社に挟まれ一人で業務を遂行できる規模の適切さがこの地を選んだ理由だ。一階は「浜作」を受け継ぐカウンター席のみ。そのカウンターもお客さんの紹介で二年前から栃の木の一枚ものにした。白木ではなく渋い色合いである。所々に配置される棚、玄関やトイレの扉は純代さんとの相談のもと、探してきた古物を組み合わせ、元あった民家の風情と安江夫妻の感覚が合わさり独自の空間が作られている。二階へ上がる階段の壁はブルグレーに統一されモダンな雰囲気を出している。東海道側の窓には宿場を想起させる手摺りが残されている。振り返ると大きなガラス窓の向こうに石の鳥居、その向こうに関蟬丸神社の社、その背景に長等山麓の緑が見える。



写真27 柎の木のカウンターテーブル（一階）



写真25 京阪電車京津線と関蟬丸神社下社



写真28 「佳山」 外観



写真26 「佳山」 店主の安江洋造と純代さん（二階）

頭の中で「これやこの行くも帰るも別れては〜」と蟬丸の詩が流れた瞬間、今度は反対方向から「キーン！」とブレーキをかけながら勾配を降りる列車がその景色を掻き消して行った。純代さんの言う面白味のある店構えとはこのことかと納得した。

チヨッコ

長等商店街の中程にある日蓮宗のお寺、本要寺。その山門をくぐり右手に本堂を見ながら進むと小さなお稲荷さんが見える。その向こう側のブロック塀を抜けると突然世界が変わる。古民家と板塀、木々で囲まれ小さな丸テーブルと椅子が配置された空間がある。そこはある種「逃げ場所」とも言える。二〇二三年、学生とろうろしていた瞬間に発見した場所である。好奇心旺盛な学生は吸い込まれるようにその古民家のドアを開け「ごめんください！」と語りかけていたことを思い出した。そもそも学生に魅力ある場所を撮影記録し、運が良ければ聞き取り調査を促す課題を出した張本人は私である。地図があつても辿り着くことの難しい古都大津、寺内町の特徴ある路地裏にひっそりとたたずむ薪火イタリアン「ciocco」オーナーシェフの谷古宇祥平さんにお話を伺った。

谷古宇氏は東京都足立区出身、料理人として京都から経歴が始まる。しばらくして自身の在り方を追求すべくイタリア各地へ、食の背景にある文化、農業、環境など自ら現地に住むことで大地と共生するための土台づくりが始まる。帰国後、京都の産廃業者会長と出会ったことが大きな転換点となる。循環型社会を目指すビジョンに「食」が組み込まれていることに関心を持ち入社、そのつながりから京北町の山間部にて畑作放棄地に山水が流れ込むように開墾し、無農薬農業と山羊と合鴨と暮らす畜産生活が始まる。食材選びではなく自ら作り出すことが自身

の料理につながると確信する。そのことが頭にある限り辛い苦しいと感じることはなかったと谷古宇さんは語る。この時期がコロナ禍と重なっていたこともあり、自身の料理の方向性を決定付ける時間となった。

退社後すぐに拠点となる場所の選定が始まった。高島、近江八幡、守山なども探すが、長等商店街の魅力と本要寺住職との出会いから現在の地を拠点にすると即決、築一〇〇年超の長屋二棟を借り、一棟を店舗改築した。新調したのはフロアを一段高い位



写真31 店内の壁と柱



写真29 「ciocco」 外観と中庭



写真32 磨き仕上げのカウンターと新しい柱



写真30 「ciocco」 オーナーシェフの谷古宇祥平さん

置に、磨き仕上げのカウンター設置、薪を燃やすグリルくらいで、長い年月を経て育まれた壁や柱はそのままであることが特徴的だ。二〇二二年六月より開店「c i o c c o」はイタリア語で薪、丸太、木材を意味する。最後に「自分の料理の食材が店のまわりで採れる世界をつくりたい。」と熱く語った。

二回にわたり大津宿「新しい古民家」の事例を紹介した。四組の飲食を営む家主と共に焦点を当てた。共通する理念は「触り過ぎない」こと。そして古民家再生を志す熱いオーナーの意思とその思いを受け入れる地域のキーパーソンの存在が重要である。さらに思いを形にするデザイナー、施工業者へと意思疎通され、未来の大津宿のイメージを共有していく。そのような場の懐の深さに気づかされた。

## 追記

紀要の冒頭は、二〇二四年正月に起きた能登半島地震をはじめとする地震、大雨による水害、土砂災害、猛暑日の記録更新など自然の脅威を目の当たりにした一年であったことを記した。一方、コロナ禍が収束した近江（滋賀県）はビワイチ推進が進み、観光振興をきっかけとする旅のあり方、ウエルビーイングな暮らしなど、琵琶湖岸でのキャンプ増加に象徴されるように、ビワイチを含めて人々の余暇の楽しみ方に変化がある様に感じる。自然環境の豊かさを自分なりの方法で感じる行動の変化が生じているのだ。

その反面、異常気象と呼ぶに値する気候変動、地球温暖化をリアルに感じてしまう状況と言える。それでも暑さ寒さに耐えながら自転車による地域リサーチは、時代や社会の変化に対応しながらも生き延びる（潰されることなく存続する）施設、物件などと巡りあうことができる。そこには人々の関係性の交錯と継承により、残されるべくして残されていると改めて感じた。その場所にしかない一期一会が、新たな価値付け、意味付け、解釈が加わり、新しい文化や物語がつくられるのだ。

今日社会は蓄積されたデータに基づくシステム思考の確実性が主流になりつつある。対極であろう現場主義のイノベーションを促進する可能性も意識しておく必要がある。

成安造形大学附属近江学研究所  
紀要 第14号

発行日 令和7年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学

附属近江学研究所

T 520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 小寺善通

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社

